

丹波佐吉〈たんばさきち〉（柏原町）

コンコン、コンコン、コンと、石の板に、字をきざむのみの音。
コーンコンコン、コーンコンコンと、石材の柱のあらけずりをするひびき。
きょうも、金兵衛の仕事場は、たいへん、にぎやかでした。

「おーい、もう、ひるにしようぜ。はらべこのぺこぺこだあ。」

口口〈くちぐち〉に立ちあがった石工たちは、石の粉をはらって、手をあらいに、井戸へあつまってきました。
「おやっ、おまえ、きょうもきているな。これこれ、そんな、よごれた手で、つるべをさわると、ばちがあたるぞ。さあ、どいたどいた。」

あかまみれの男の子が、井戸にいるのをみて、おいはらおうとしました。

「なんやい、この水、おじさんの水じゃないやろ、だれがのんでも、かまへんのや。」

「ばか、また、りくつをこねやがって。」

「おらあ、きのうから、なにも、くつとらん。」

「のみたけりゃ、あっちの池の水をのんでこい。さあ、どけどけ。」と、ひとりの石工が、その子の首すじをつかんで、つきとばそうとしました。
「あんなきたない池の水、のめるかい。のめるんなら、おじさん、のんでみたらいい。子どもだとおもって、ばかにしてる。」と、かおをまっかにして、おこりました。

「これこれ、子どもをいじめるじゃない。のませてやれ。」と、にこにこしてちかずいたのは、金兵衛でした。

ゴクンゴクンと、つめたい井戸水をのんでいる子をみていた金兵衛は、

「うん、なかなか、しっかりしてるようじゃ。かわいそうに、ろくに、めしもくつとらんらしい。」とつぶやいて、「おじさんが、いいものやるから、こっちへおいで。」と、自分の小屋へつれていきました。

これは、文政三年（約一五〇年前）のことで、この難波金兵衛は、丹波大新屋の石工ですが、但馬〈たじま〉の竹田へまねかれて、お宮の玉垣をつくっていた時のことです。

この子は、日下佐吉〈くさかさきち〉といい、五才の時、父母に死にわかれ、おじさんに、せわになっていました。

「いつも、ここへきているが、石をきざむのが、すきかい。」

「うん、ぼく、とつても、おもしろいんだ。ぼくにも、手つだわしてくれないかなあ。」

金兵衛は、しばらく、その子の目を見つめていました。

「よし、やらしてやろう。こののみとつちをかしてやるから、なんでも、すきなものを、きざんでみろ。」と、工事場のすみにある五〇センチメートルばかりの石をもってきてやりました。

その日から、佐吉は、工事場のかたすみで、コンコンやりはじめました。

「子どものことだ。すぐ、あきて、やめるだろう。」と、金兵衛も石工たちも、思っていました。三日たつても、四日たつても、やめません。朝早くから、夕方まで、一心に、石をうっているのです。

そのうちに、赤ちゃんをだっこした女の人を、ほっているのが、わかってきました。

「これ、ぼくと、おつかあだ。ほってみたいとおもっていたんだ。」

佐吉は、石であれた両手に、その像〈ぞう〉をしっかりとかかえて、金兵衛に見せにきました。

「うーん。これは、うまい。」といった金兵衛は、まわりで働いている石工たちにも見せました。

「おまえたち、これだけの仕事ができるかい。」といわれて、石工たちは、だまってしまいました。

こうして、金兵衛に、みこまれた佐吉は、養子〈ようし〉となって、丹波大新屋に帰ってきました。が、数年たつて、金兵衛の家にも、男の子をさずかりました。

佐吉は、その弟をたいへんかわいがりました。弟が五才になったある日のことです。

「おとうちゃん、上方〈かみがた〉（大阪方面）へ出て、修行したいんだ、ゆるしておくれ。」

「いや、わしも、そう思っていた。わしの持っているものは、みな教えてやったからなあ。」

金兵衛のゆるしをえた佐吉は、大和〈やまと〉、淀〈よど〉、伏見〈ふしみ〉、浪速〈なにわ〉の石工をたずねまわっては、べんきょうしました。

「わたしは、丹波で育った佐吉だ。」と、「丹波佐吉」の名をとまえ、めずらしい物が見つかる、丹波大新屋にいる金兵衛におくり、昔のご恩がえしをわすれませんでした。

浪速の南堀江龍平橋〈みなみほりえりゅうへいばし〉の石為〈いしため〉にいる時でした。

石工のなかまで、「七福神」の石のほりものをして、うでくらべをしたことがありました。

七日七晩、石工たちは、ほりつづけました。

ほりあげた七福神をならべた時、だれも、丹波佐吉のほりものを見て、うなりました。

「丹波佐吉には、かなわん。形といい、はだといい、生きているようだ。浪速もんのまけだ。」

その時、大声をだしたのは、卯〈う〉の吉〈きち〉という石工でした。

「なにいうのや。こんな丹波の山ぎるにまけてたまるか。これはまぐれあたりだ。」

「おや、丹波の山ぎるといったな。よし、もう一度やろう。こんどは石の尺八〈しゃくはち〉だ。」と、佐吉もむつとしていいました。

佐吉と、卯の吉は、それから、七日のあいだ、石の尺八をきざみしました。

「ほれ、できたぞ。」と、石工たちに尺八を見せたのは佐吉でした。卯の吉はだめでした。

「ポオー」と、竹の尺八とおなじように、やわらかい音でなりました。

この尺八は、後、天皇にさしあげ「日本一」と、おほめのことばをいただいたといひます。

佐吉は、りっぱな作品をたくさんのごしています。

大阪難波五番町の石工小西伝吉の家にある文珠菩薩〈もんじゅぼさつ〉、上山家にある石〈いし〉狐、大阪金利寺の役行者〈えきぎょうじゃ〉、柏原八幡宮の狛犬〈こまいぬ〉などは、丹波佐吉の作として、今も、そのすばらしさを、たたえられています。

